

“天才”を育てる技術 ～才能の見つけ方、伸ばし方～

—ピアニスト 辻井伸行“奇跡の音色”はこうして生まれた—

関東支部2013年度「エグゼクティブセミナー」

ピアニスト／東京音楽大学 准教授 **川上 昌裕** 氏

かわかみまさひろ 1965年北海道旭川市生まれ。東京音楽大学(ピアノ演奏家コース)を首席で卒業。1988年、マリア・カナルス国際コンクール入賞。1992年、留学先のウィーン・コンセルヴァトリウムを首席で卒業。1995年帰国。同年4月、当時小学1年生の辻井伸行氏と出会い、以来高校3年生まで12年間にわたりピアノを指導。現在は東京音楽大学で後進の指導にあたりながら、ピアニストとしてコンサート活動やテレビ・ラジオへの出演、楽譜の編集出版、執筆、講演、コンクール審査、マスタークラスの講師など国内外で活躍中。



音楽が導いた出会い

辻井伸行君は、2009年にアメリカで行われたヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールで優勝し、日本はもちろん、世界でも一躍有名になりました。今では、誰もが知る一流のピアニストとして国内外で活躍しています。私は、彼が小学1年生から高校3年生までの12年間、ピアノの指導をしてきましたが、その出会いは偶然から生まれたものでした。

音楽大学を卒業後、ピアニストを目指してウィーンに7年間留学していた私は、そのままヨーロッパを拠点に演奏活動をしようという思いを抱いていました。そのようなときに、恩師から母校の音楽大学での就職の話があり、演奏活動が続けられるなら、学生や子供たちの指導者になるのもよいのではないかと考え、日本に帰国することにしました。そこで紹介されたのが、小学1年生の辻井君でした。生まれつき両目が見えない視覚障害をもちながらも、ピアノが大好きな生徒だという話で、私はそれほど大変な仕事になるとは思わず、ごく軽い気持ちで指導を引き受けました。

第一印象は、話をしているとても気持ちのよい子であること、子供にしてはピアノが上手だということでした。しかし、そのときはまだ彼が天才かどうかなど、全くわかりません。ただ、耳のよさが非常に光っていました。耳で音を聴いて鍵盤で正確に再現できる聴音能力は、音大生のレベルはあったと思います。そして何よりも、ピアノを楽しそうに弾いている。その楽しそうな感じがとても印象的でした。私はそのような彼の様子を見て、ハンディキャップがあるからといって手抜きをしたりせず、専門的な立場から指導して、できる限り伸ばしてあげたいという使命感にも似た決意をしました。

実際にレッスンを始めてみると、彼が課題を次々にこなしていく速さに、私は大変驚きました。これは相当なスピードで引っ張っていかなければ、せっかくの才能の開花を遅らせてしまうと、私自身も全力を投入して教え始めました。そして、週1回のレッスンが2回になり、すぐに週3回のペースで、彼の家に通うようになりました。



一人一人違うのが理想の教育

辻井君の指導で一番の問題となったのは、楽譜を読む作業でし

た。楽譜には音符だけではなく、音の強弱や速度、多彩なリズムが記号や言葉で書かれています。私はそれらの情報をカセットテープに吹き込んだ「譜読みテープ」を作り、それを楽譜として覚えさせる方法を考えました。そこから彼が音を正確にとった後、実際のレッスンで音楽の解釈を加えながら指導していくのです。練習が高度になると、普通はどこかでつまずき、弾けなくなるところが出てくるものです。しかし、彼はどこまでも対応してきます。楽譜を目で見て読むよりも速いと思えるぐらいに譜読みができてしまう。彼の練習に間に合うように、私は譜読みテープを作る作業に日々追われるようになりました。

生徒を指導するとき、マニュアルに沿って教えるのは簡単で楽なことですが、私は辻井君を教えた経験から、一人一人に一番ふさわしい方法、教え方、教材の与え方があると感じています。彼にとっては、一音読むのも時間がかかる大変な作業ですから、なるべく効率のよい方法を考えなければなりません。すると、今までのピアノの教授法で当たり前とされてきたものに対する疑問が湧いてきました。この曲集を練習することが本当に必要なのか、この順番で教えるのは本当に正しいことなのかなどを改めて考え直し、無駄なものは削っていきました。

私は、理想的な教育は、きめ細かい、個別の対応にあると思っています。生徒にはいろいろな個性の人間がいます。強い部分と弱い部分は、人によって違います。例えば、私は絵が苦手ですが、絵を描くことが得意な子供もいます。自分が苦手な分野のよさは、なかなかわかりにくいものです。しかし、指導者はそれを見逃してはいけません。その生徒が積極的になれる部分があったら、そこに何か光るものがあるかもしれないということを、私は常に忘れないように心がけています。



才能を伸ばすために必要なもの

才能を伸ばすためには、モチベーションがとても大切です。私が辻井君を指導する際に気をつけたことは、彼のやる気がなくなるようにすることでした。幸い、彼も私も挑戦意欲が旺盛で、新しいことや、難しくても誰もやらないことにチャレンジするのが大好きですが、それでも飽きがきたり、伸び悩んだりすることがあります。そのようなときには、彼が今興味を持っていることや音楽など、常に彼の個性を尊重しながら、たとえ回り道になったとしても目標とするレベルにいつ

れは到達できるプログラムを考えながら指導してきました。

さらに、彼を応援してくれる人がたくさんいたことも大きな助けになりました。一流の指揮者や作曲家の方々が、彼のためにオーケストラとの競演やリサイタルの場を提供してくださったのです。こうした挑戦や成功体験は、非常に大きな励みになったと思います。

しかし、才能がどこまで伸びるのか、どのような指導が適切かを見極めることは非常に難しいことです。私はこれまでの経験から、才能を伸ばす最も大きな力は、本人のやる気ではないかと思っています。辻井君の場合、小学生の頃から将来はピアニストになると決めていました。これが何より強いことでした。両親をはじめ応援してくれる人々のサポート、海外のコンクールに挑戦するチャンスを手にする経済力にも恵まれていたことも事実ですが、彼の成功の理由は、彼自身が自分の能力を信じていたことです。さらにお母様は、彼に対して非常に強い“根拠のない自信”を持っていました。成功する人は皆、この根拠のない自信というものをどこかに持っているような気がします。

また、彼のお母様はアナウンサーをされていたこともあり、業界の有名な方々とも普通に会話ができ、さまざまな分野の人との出会いを上手に構築できる社交性も持っています。辻井君も、誰の前でも委縮せず、全くの自然体で話ができる性格です。彼は人前に出て、本番でこそ本領を発揮するという、ピアニストにとってはかけがえのない才能を持っているのです。



天才に不可欠なポジティブ思考

何でもできるという勢いで進んできた辻井君でも、無謀としか思えない挑戦をしたことがあります。それが、2005年に行われたショパン国際ピアノコンクールでした。ピアニストの最高の登竜門であるコンクールに、17歳という最年少で挑んだのです。準備も想像を絶するものですし、現地での練習場所や体力などさまざまな問題があり、常識的に考えればありえないことです。しかし私の中では、彼だったら奇跡を起こすかもしれないという期待もありました。2年間の猛練習を積み、私も大学を1か月間休んでポーランドに付き添うという、両者にとって全てをかけた挑戦になりました。

コンクールではセミファイナリストに残り、ポーランド批評家賞までいただくことができました。17歳の彼が、コンクールに参加できる26歳までの経験豊かな有名人に交じってのこの成績は、奇跡と言っても過言ではありません。しかし、彼にとってはファイナリストになれなかったということが初めての挫折であったようです。最後まで残ると心から信じて、事実、素晴らしい演奏をしました。そのときの屈辱感が、4年後のヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールの優勝につながったのかもしれませんが。

しかし、挫折と言っても、彼からはそれほど悲壮な感じは受けませんでした。それが、彼の実によい性格なのです。私は、彼の成功にはその性格が一番大きく影響しているように思います。コンクールの後も、悲しんでいる大人たちを本人が慰めているという状況でした。いつも本当に明るいのです。

辻井君とお母様は、いわゆる究極のポジティブ思考を持っており、自分たちにできないことはないと思っています。彼は何かに挑戦するときには必ず、自分は絶対できると言います。見えないということは、私から見れば相当大変なことですが、それをものともしない積極的

な思考を持っています。このパワーは、私が彼から学んだ大切なことの一つです。彼の指導を通じて、私は彼に教えられたことのほうが多かったと思っています。



才能は無量大

小学1年生から高校3年生まで辻井君と密に接してきた私は、いつかは彼を自分の手から別の先生に手渡さなければいけないと考えていました。それは、いろいろな人からよい影響を受けて、さらに大きく育てていってほしいからです。彼の性格は本当に純真で真っ白です。演奏にもそれが表れていて、自分の表現というものをなかなか出させません。いずれは自分の個性を表現として作ってきたいのですが、あまり急いで小さくまとめてしまうのも惜しいことです。どこまでも彼が伸びていきたい方向に伸ばして行って、最後の最後で方向づけをしてあげればよいと私は考えてきました。彼にとって一番よいやり方を皆で模索した結果、今では複数の先生方に彼の指導をお願いしています。直接の指導者ではなくなった今でも、コンサートを聴きに行くなど、彼とのよいお付き合いはもちろん続いております。

彼は今、作曲にも取り組み始めました。自分の好きなように、純粹に感じる音で曲を作り、即興で演奏するなど、ありのままの等身大の自分で勝負しています。できるところでやりながら、ときには人の手も借りつつ発展していく。それによって、人が喜ぶものを作り出す。彼の音楽は“奇跡の音色”と言われます。美しく心打つ音色は、どのように生まれるのかとよく聞かれます。私自身もはっきりとはわかりませんが、音楽とは不思議なもので、その人が感じているもの、感じ方がそのまま音になります。辻井君の音楽も、そういう音色なのではないでしょうか。

これからも多くの人と出会い、専門的なことを学んでいけば、彼はさらに高いところまでいくのではないかと思います。私は、彼の才能はもちろん、人間性を非常に尊敬してきました。本当にすごいと心から感動する瞬間が何度もあり、その度に私は、素直にそれを表現してきました。素晴らしいところを褒めながら、こうすればもっと高いところ目指せるといったアドバイスも同時に伝え、思いつく限りのところまで引き上げて育てるというスタンスでずっと彼に接してきました。12年間も師弟関係が続くというのは非常にまれなことだと思いますが、私たちは音楽の方向性や趣味など一致するところが多かったのか、本当に楽しくレッスンを続けることができました。その結果、大きなコンクールで優勝できる器になって、最近では独自の演奏活動も始めています。自分がやってきたことは決して間違っていないのだと、とても嬉しく思っております。

